

地域子育て支援拠点研修事業＜東北開催＞ 中堅支援者向け研修

《開催概要》

- 開催日 平成22年11月28日（日）10:00～16:30
- 会場 仙台市子育てふれあいプラザのびすく泉中央
- 主催 財団法人子ども未来財団／NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省／（社福）全国社会福祉協議会／宮城県／仙台市
- 協力 NPO法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク／
仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台・泉中央・長町南
- 参加者数 参加者合計130名（男性7名・女性123名）
（行政28名、NPO・任意団体47名、他団体・企業23名、その他32名）

《プログラム》

■主催者挨拶■

財団法人子ども未来財団 研修事業部

武田久恵さん



NPO法人子育てひろば全国連絡協議会

副理事長 野口比呂美さん



■プログラム1 基調報告■

『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

黒田 秀郎さん（厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課
少子化対策企画室 室長）

地域子育て支援拠点事業の概要や位置づけ、現状や今後の目標について、統計データの説明を交えながらお話しいただきました。



『地域子育て支援拠点事業は、核家族化や地域のつながりの希薄化等の背景をうけ、子育て現場の実践から生まれ、現場の声を反映させた事業です。平成21年に第2種社会福祉事業として児童福祉法の中に位置付けられたことで今まで以上に期待されています。

平成22年1月の「子ども・子育てビジョン」では、4つの柱のひとつに「多様なネット

ワークで子育て力のある地域社会へ」があり、主要施策「子育て支援の拠点やネットワークの充実が図られるように」の項目として「地域子育て支援拠点の設置促進」をあげています。平成26年までの数値目標は、40%増の10,000ヶ所としています。

「ひろば型」では、4つの基本事業に加えて、多様な子育て支援活動や関係機関とのネットワーク化を図り機能拡充を図る事業について、ソフト交付金の評価ポイントを加算しています。例えば常設のひろば開設が困難な場合は、「出張ひろば」で、常設のひろばを核に、近隣地域への支援を拡充することができます。

また、現在、新たな次世代育成支援のための包括的・一元的な制度構築に向けて、「子ども・子育て新システム」についてワーキングチームで検討を重ねています。育児休業から保育、放課後対策へと切れ目のないサービス保障を、ひとつの仕組みの中で対応し、幼保一元化を含め、多様なサービスを整備していきます。また、利用者本位の仕組みとして、利用者と事業者の契約の制度を導入することも検討しています。

地域子育て支援拠点には、多様な利用者ニーズへの対応として、多様なサービス(一時預かり等)の担い手となることを期待しています。さらに利用者の立場に立った視点で、いろいろなサービスメニューの選択肢からサービスを選ぶサポートをすることも重要になってくるでしょう。』

■プログラム2 基調講演■

『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

[講師] 渡辺 顕一郎さん (日本福祉大学 教授)

地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について主任研究者として研究に関わられた渡辺先生から具体的な説明をいただきました。

『地域子育て支援拠点事業が増えて内容も多様な実践が行われています。ガイドラインはこうした実情をふまえて、ミニマム・スタンダードを追究し、どの拠点でも核となる理念を示したものです。

ガイドラインの構成は、基本(誰のために、何のために)、実践(何をするのか)、倫理(何を尊重すべきか)、運営(どう工夫すればいいのか)からなっています。まず、4つの基本事業を確認しておきます。「交流の促進」では、場を提供するだけでなく交流を促すスタッフの工夫が必要です。「相談」では、利用者同士が話し合うことで解決する悩みも多いことから、支え合う関係づくりが大切です。「講習の開催」には、地域の意識啓発やボランティア育成の講習が含まれます。





地域に目を向けてみると、世代を超えた子育て経験の受け渡しも、子育て現役世代の支え合いも少なくなっています。支えどころか、転勤族・核家族の増加で孤立する中、集合住宅で近隣から迷惑がられる、理解を得られないで子育てしている家庭も多い。そんな中で、拠点は子育て家庭同士や様々な世代の人、地域を結ぶ「架け橋」のような存在です。

支援のあり方として、地域との関わりが薄れ常に緊張した状態で子育てをしている親を、まず温かく迎え入れ受容することが大切です。また、親子をつなぐ役割を担い、親同士の支え合い（ピア・サポート）で不安や喜びを共有できるように支援します。利用者はスタッフの子どもへの関わりを期待しています。子どもが受容されることにより信頼が生まれ、安心して過ごせるようになり、自発性が芽生える場所として拠点は機能することができます。親を受け止めることとともに、子どもへの関わりを親に見せていくことも重要です。

ガイドラインに基づく自己評価表は、自己評価や他のスタッフによる客観的な評価に使用したり、第三者評価に際して自己点検結果として提示することもできます。活動評価と支援の質の向上につながるよう活用してほしいと思います。』



■プログラム3 分科会■

◇第1分科会 『心の問題を抱える親への対応』

[講師] 杉山 恵理子さん (明治学院大学 教授)

[コーディネーター] 山田 智子さん (NPO法人子育て応援かざぐるま 代表理事)



山田智子さん

まずはじめに、仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台の伊藤さんによる事例発表が行なわれました。「産後うつの母親」「発達障がいの疑いがある母親」「母親自身が自分の育ちに問題を抱えている」この3つの事例について、様々な問題を抱えている母親の状態が話され、気になる家庭などへの必要となる言葉かけや配慮について話し合いの導入をしていただきました。

続いて、杉山先生の解説のもと、事例紹介のDVDが上映されました。この事例では、様々な病気に苦しみながらも生きようとする姿、また、心に負った傷をどうしたら癒せるのか、親が安心できる場所の環境作りなどについて話し合いました。

その後、和やかな雰囲気の中で、参加者全員による自己紹介が行なわれましたが、その中からそれぞれの施設における事例が、数多く出てきました。

杉山先生の講義では、まず、地域の拠点としての子育て支援の意義についてのお話がありました。地域でしたいこと、出来ることは何か。また、心の問題を抱えていてもそうでなくても、地域のつながりが精神的健康度を高め、予防や介入にもつながるといふこと。さらに、地域子育て支援は、親にとって安心できる場所で支えられながら、発達段階に応じた子育て体験をすることにもつながり、母性や父性を育て、親自身がエンパワーメントされることなどが話されました。



次に、発達を支援するにあたって周産期から乳幼児期早期に大切なこと、そして、「生きることの喜びを共感する大切さ」を教えていただきました。

支援のコツとして、①支援者自身が母子のありのままを十分に受容すること、②母(子ども)の表現は、緊張、罪悪感、不安などにより加工されており、その言動により何を伝えようとしているのか、伝えないようにしているのかを汲むように聴くこと。

最後に、支援の方法とエンパワーメントの段階について、「母育て」は個別の支援から始めることが大事であり、自分を受け入れてもらえたと安心することで気持ちを言葉で伝えられるようになるなど、母親が持っている良さを引き出していけるようにしていくことが大切だということでした。

◇第2分科会 『地域子育て支援拠点からはじまるアプローチ』

〔講師〕橋本 真紀さん(関西学院大学 准教授)

〔事例報告〕三浦 三恵子さん(仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台ひろば主任)

〔事例報告〕和田 美紀さん(子育てランドあ〜べ 副施設長)



橋本真紀さん 三浦美恵子さん

まず、橋本先生から、一時預かり事業の概要や保育所型、地域密着型、地域密着Ⅱ型、それぞれの特徴について説明がありました。また、一時保育や特定保育は就労での利用が多い現状があり、子育て支援として一時預かりの大切さを話していただきました。

事例報告として、まず、和田さんから「あ〜べ」の取り組みについて、商店街開催のバザールに合わせたナイトイベント託児の実施や、カルチャーセンターと連動して（パソコン教室など）実施していることなどの報告がありました。また、スタッフがおやこ広場、託児ルーム両方とも担当することで、子どもの情報を共有できるなどのメリットが話されました。



和田美紀さん

現在、独自の一時預かりの保育過程と指導計画を作成中で、子どもの発達に合った保育を取り入れていくそうで、今後はより充実した託児付講座について取り組んでいきたいということでした。また、子どもに寄り添い、保護者の悩みなど話を聞く体制をとり、信頼関係を築いていけるよう努力していることが紹介されました。



三浦三恵子さん

続いて三浦さんから、のびすく仙台のお話を伺いました。開館当初は1館だけでしたが現在は3館に増え、来館者数は減少したけれど、一時預かりの利用は横ばい状態であるということでした。理由としては、利便性が良いこと、料金設定や理由の問わない預かりであることがあげられました。また、ひろばと一時預かりの両方を利用することで、イベントを通じて知り合った人が一緒に利用したり、職員から勧められて利用する人など、ひろばからの利用も多いそうです。母親支援の一時預かりと位置づけし、ひろばと託児スタッフが連携してかわり、母親の気持ちに寄り添い、信頼関係をつくっているそうです。

今後の課題としては、託児ボランティアなどの他団体との連携を強化すること、病児・病後児や時間外の預かり、ひとり親など経済的支援の必要な親への対応、障がい児の受け入れなど、仙台市全体の子育て支援の取り組みを考えていく必要があるのではないかというお話がありました。

後半は3グループに分かれ、一時預かりの利点と課題について話し合いました。

子どもにとっては、「母親以外の大人とかかわりあう」「初めての集団生活の場」「異年齢の子ども同士のかかわりあいができる」「社会性が学べる」「自立心が養われる」などのメリットがあり、母親にとっては、「自分の都合で預けることができる」「子育ての悩みについて話を聞いてもらえる」「預けられる場所があるとわかってもらうことによる安心感」「自分の子どもの成長と一緒に喜んでくれる大人がいる安心感」「子どもの別な一面に気付く」などの良さがあるという話が皆さんから出ました。

また、「継続ではない子どもをみるのは難しく、泣きっぱなしという時もあるが、何かを感じ学んでいるのではないかと思っている」「母親とスタッフが子どもの情報を共有することで、悩み相談につなげやすい」「子どもと深くかかわることで、子どもの様子が変わり、その変化をみて親の表情も柔らかくなる」など、支援者が感じている一時預かりのメリットも上げられました。

また、障がいをもつ子どもの預かりの問題、短い時間で信頼関係を築くことの難しさ、ひろばなどに来ることができない親子へのフォローも必要という意見もあげられました。

一時預かりを行っている団体の参加が多かったので、お互いの取り組みなど情報交換もできる機会になったようです。最後まで活発な意見交換がされていました。

◇第3分科会 『拠点スタッフの役割・スタッフに求められる力（応用編）』

〔講師〕 渡辺 顕一郎さん（日本福祉大学 教授）

〔事例報告〕 大山 道子さん（社会福祉法人北杜福祉会泉チェリー保育園 園長）

〔事例報告〕 星 玲子さん

（NPO法人しらかわ市民活動支援会おひさまひろばスタッフ）



渡辺顕一郎さん



大山道子さん

星玲子さん

まず、大山さんが、泉チェリー保育園開園から、支援活動の歩みを紹介して下さいました。開園と同時に地域の要望に応じていく形で支援活動を始めたが、十分な理解や準備の不足のため、試行錯誤しながらのスタートとなったそうです。

事業内容を理解してもらい、親子とつながりをもつことができる、子どもと楽しく遊ぶことができる、親からの信頼がある、子育てを経験している等を考慮し、若手1名、子育て経験者1名からスタートしましたが、保育士が支援者になることへの戸惑いもあったことにふれ、支援事業未経験者の保育士が2年間、支援者となり活動した感想が紹介されました。保育士（支援者）の心の変化が支援内容の変化、親子への対応の変化となり、支援者の資質向上へとつながっているとのことでした。

続いて、星さんより、支援者と利用者とのつながり、また、つながるためのサポート機関について、お話していただきました。

支援者であると共に、同じ市民、近隣者であることで利用者は支援者との垣根の低さを感じることができるそうです。垣根の低さは、「利用しやすさ、話しやすさ」でもあることや、スタッフとの信頼関係が築かれると、ひろばは「信頼感のある場所」にもなること、また、スタッフは支援技術の向上と共に信頼感の維持に努めていることが紹介されました。

事例報告に続いて、6グループに分かれてのグループワークとなりました。

グループワークでは①「利用者同士をつなげるために行なっていることは何か」、②「どんな遊び、イベントを提供しているか」、③「②の遊び、イベントは誰が提供しているか」、④「②の遊び、イベントを提供できるのは誰か」の4つの課題について話し合いました。

結果、遊びやイベントはスタッフ主体の「企画してあげている」遊びやイベントがほとんどであることがわかりました。スタッフが主体でなくても、利用者の中には様々なスキルをもっている人もいますので、そのスキルを生かした利用者主体の遊び、イベントを企画することの利点にも気付きました。

続いて、渡辺先生より「母性」と「先回り育児」についての話がありました。先回り育児とは危険やトラブルを先に回避しながらの育児で、周りに迷惑をかけないように気を遣っている育児でもあります。それは自分以外の地域の人々が子ども達を寛容に受け止め、守ってくれなくなってきたため、母親一人が「自分で全て守らなければならない」という気持ちの表れでもあり、そのことで「強すぎる母性」が出て、「先回り育児」につながっているのではないかとのことでした。

